

鶴

世阿弥作

季は	地は	シテ	ワキ	後	シテ	ワキ	前
四月	摂津	鶴の靈	前に同じ		船人	旅僧	

「世を捨人の旅の空。／＼。來し方何処なるらん。

詞 「是は諸国一見の僧にて候。我此程は三熊野に参り

て候。又是より都に上らばやと思ひ候。

道行 「程もなく。帰り紀の路の関越えて。／＼。猶行く

末は和泉なる。篠田の森を打ち過ぎて。松原見え
し遠里の。こゝ住の江や難波潟。芦屋の里に着き
にけり。／＼。

「急ぎ候ふ程に。是は早津の国芦屋の里に着きて候。

日暮れて候ふ程に。宿を借らばやと思ひ候。

「悲しきかなや身は籠鳥。心を知れば盲亀の浮木。
たゞ闇中に埋木の。さらば埋れも果てずして。亡
心何に残るらん。

一声 「浮き沈む。涙の波の空穂舟。

地 「こがれて堪へぬいにしへを。

シテ 「忍びはつべき隙ぞなき。

ワキ 「不思議やな夜も更方の浦波に。幽かに浮び寄る物

を。見れば聞きしに変らずして。舟の形は有りながら。唯埋木の如くなるに。乗る人影もさだかならず。あら不思議の者やな。

シテ「不思議の者と承る。其方は如何なる人やらん。もとより憂き身は埋木の。人知れぬ身とおぼしめさば。不審な為させ給ひそとよ。

ワキ「いや是は唯此里人の。さも不思議なる舟人の。夜々来ると言ひつるに。見れば少しも違はねば。我も不審を申すなり。

シテ「此里人とは蘆の屋の。灘の塩焼く海士人の。類ひを何と疑ひ給ふ。

ワキ「塩焼く海士の類ひならば。業をば為さで暇ありげに。夜々来るは不審なり。

シテ「実にく暇の有る事を。疑ひ給ふも謂あり。古き歌にも蘆の屋の。

ワキ「灘の塩焼き暇なみ。黄楊の小櫛は刺さず來にけり。

シテ
「我も憂きには暇なみの。

ワキ
「汐にさゝれて。

シテ
「舟人は。

地
「さゝで來にけり空穂舟。く。現か夢か明けてこそ。みるめも刈らぬ蘆の屋に。一夜寝て海士人の。心の闇を弔ひ給へ。有難や旅人は。世を遁れたる御身なり。私は名のみぞ捨小舟。法の力を頼むなり。く。

ワキ詞
「何と見申せども更に人間とは見えず候。如何なる者ぞ名を名乗り候へ。

シテ詞
「是は近衛の院の御宇に。頼政が矢先にかゝり。命を失ひし鶴と申し、ものゝ亡心にて候。其時の有様委しく語つて聞かせ申し候ふべし。跡を弔うて賜はり候へ。

ワキ
「さては鶴の亡心にて候ふか。其時の有様委しく語り候へ。跡をば懇に弔ひ候ふべし。

地クリ

「さても近衛の院の御在位の時。仁平の頃ほひ。主上夜な夜な御惱あり。

シテサシ
「有験の高僧貴僧に仰せて。大法を修せられけれども。其しるし更になかりけり。

地
「御惱は丑の刻ばかりにてありけるが。東三条の森の方より。黒雲一村立ち来つて。御殿の上におほへば。必ずおびえ給ひけり。

シテ
「即ち公卿詮議あつて。

地
「定めて変化の者なるべし。武士に仰せて警固有るべしとて。源平両家の兵を撰ぜられける程に。頼政を撰び出だされたり。

クセ
「頼政其時は。兵庫の頭とぞ申しける。頼みたる郎等には。猪早太。唯一人召し具したり。我身は二重の狩衣に。山鳥の尾にてはいだりける。尖矢二筋。滋籐の弓に取り添へて。御殿の大床に伺候して。御惱の刻限を。今やくと待ち居たり。さ

る程に案の如く。黒雲一村立ち來り。御殿の上に
おほひたり。頼政きつと見上ぐれば。雲中に。怪
しき者の姿あり。

シテ「矢取つて打ちつがひ。

地「南無八幡大菩薩と。心中に祈念して。よつぴきひ
やうと放つ矢に。手答へしてはたと当る。得たり
やおうと矢叫びして。落つる所を猪早太。つゝと
寄りてつゞけさまに。九刀ぞ刺いたりける。さて

火を灯し能く見れば。頭は猿尾は蛇。足手は虎の
ごとくにて。鳴く声鶴に似たりけり。恐ろしなん
ども。愚かなる形なりけり。

「實に隠れなき世語りの。其一念を翻へし。浮ぶ力
となり給へ。

シテ「浮ぶべき。たより渚の浅緑。水のかしほに有らば
こそ。沈むは浮ぶ縁ならぬ。

地「實にや他生の縁ぞとて。

シテ 「時もこそあれ今宵しも。

地 「なき世の人に合竹の。

シテ 「棹取り直し空穂舟。

地 「乗ると見えしが。

シテ 「夜の波に。

地 「浮きぬ沈みぬ。見えつ隠れ絶々の。幾重に聞くは
鶴の声。恐ろしや冷ましや。あら恐ろしや冷まし
や。(中入)

ワキ歌
「御法の声も浦波も。く。皆実相の道弘き。法
を受けよと夜と共に。此御経を読誦する。く。

一仏成道観見法界。草木国土悉皆成仏。

後ジテ 「有情非情皆共成仏道。

ワキ 「頼むべし。

シテ 「頼むべしや。

地 「五十二類も我同性の。涅槃に引かれて真如の月の。
夜汐に浮びつゝ是まで来れり。有難や。

「不思議やな目前に来る者を見れば。面は猿足手は虎。聞きしにかはらぬ変化の姿。あら恐ろしの有様やな。

シテ
「さても我恶心外道の変化となつて。仏法王法の障りとならんと。王城近く遍満して。東三条の林頭に暫く飛行し。丑三つばかりの夜な夜なに。御殿の上に飛び下れば。

地
「即ち御惱しきりにて。玉体を惱まして。おびえた

まいらせ給ふ事も。我なす業よと怒りをなしへに。
思ひもよらざりし頼政が。矢先に中れば変身失せて。落々磊々と地に倒れて。忽ちに滅せし事。思へば頼政が矢先よりは。君の天罰を当りけるよと。
今こそ思ひ知られたれ。其時主上御感あつて。獅子王と言ふ御剣を。頼政に下されけるを。宇治の大臣賜はりて。階をおり給ふに。折節郭公音づれければ。大臣とりあへず。

シテ
「ほとゝぎす名をも雲井に上ぐるかなと。仰せられ
ければ。

地
「頼政右の膝をついて。左の袖をひろげ。月を少し
目に懸けて。弓張月の入るにまかせてと仕り。御
剣を賜はり。御前を罷り帰れば。頼政は名をあげ
て。我は名を流す空穂舟に。押し入れられて淀川
の。よどみつつ流れつ行く末の。宇渡野も同じ蘆の
屋の。浦わの浮洲に流れ留まつて。朽ちながら空
穂舟の。月日も見えず暗きより。暗き道にぞ入り
にける。遙かに照らせ山の端の。く。月と共に
海月も入りにけり。海月と共に入りにけり。